

# チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立支援学校天王みどり学園 加賀谷 勝

## 心のバリアフリーを考える

2月1日の秋田さきがけ新報の社説に「心のバリアフリー」というテーマで、3年後の東京五輪・パラリンピックは、障害のあるなしにかかわらず誰もが支え合って生きる共生社会実現への大きな契機になることや県内の特別支援学校が取り組んでいる障害理解のための「出前授業」などが紹介されていました。改めて、「心のバリアフリー」について考えてみます。

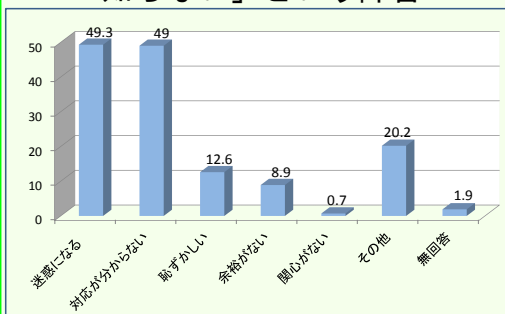
### 1 4つのバリア

・私たちが生活を送る上で、4つのバリアがあるといわれている。

①物理的バリア ②制度的バリア ③文化・情報のバリア ④心のバリア

①～③のバリアは、時間とお金をかければある程度取り除くことが期待できるが、④のバリアを取り除くことは難しい。心のバリアを取り除くためには、教育の力＝人が必要である。自分たちの周りには障害のある人も含めて、いろいろな人がいることに気付くことが心のバリアフリーの第一歩である。

### 2 「知らない」という障害



右のグラフは、「高齢者や障害者を手助けしない理由」を尋ねた調査結果である。迷惑になる、対応が分からないという理由は、「知らない」（無理解・誤解）から生まれている。昨年4月に障害を理由にした不利益な対応を禁止した「障害者差別解消法」が施行された。しかし、大切なことは、「法律や制度ができたから差別をしない、なくす」ではなく、心のバリアを取り除く教育を通して、

「知らないという障害」をなくすことであり、一人一人の違いを認め合い、助け合いながら、人と付き合える子どもを育てることである。そのためには、障害理解教育を教育課程に明確に位置付け、子どもの発達段階に合わせて系統的・計画的に指導するとともに、ぜひ特別支援学校が取り組んでいる障害理解授業を活用してほしい。

### 3 相手がしてほしいことに気付いて支援する（私の視点＋相手の視点をもつ）



Q：4人の子どもに3個のりんごを分けるとしたら、あなたはどのようにしますか？

A： 1個のりんごを4等分し、12個にした上で、1人に3個ずつ分けるということが一般的である。しかし、4人の中には、りんごが嫌いな子どもがいるかもしれない、お腹がいっぱいな子どもがいるかもしれない。一番よい方法は、「子どもに聞く！」ことではないかと思う。



Q：駅の券売機の前に、紺色の傘がありました。そのとき、目の不自由な人に「すみません、傘を探しているのですが」と話し掛けられたら、あなたはどのように声を掛けて、その人の傘だと確認しますか？ ※色の識別が困難な状況

A： 手触りや音で判断していることが考えられるので、「何か印がついていますか」「どんな傘ですか」と聞く。あるいは、直接触ってもらうように促す。つい言ってしまいがちなのが、「何色の傘ですか」である。

社説には内閣府の障害者に関する調査で「障害を理由とする差別や偏見はあるか」の質問に9割近くが「ある」と答えており、解消が急務であり、大人の意識改革も欠かせないとありました。私たちは差別的な意識を変えることに本気になって取り組む必要があります。